

# タグミミック・インベンションの理論

—その基本概念からの考察—

柳 沢 浩 哉

タグミミック・インベンションは、アメリカの高等教育における作文指導においてはよく知られた理論であり、実践においても成果を上げている理論であるが、わが国には未だ紹介されていない。タグミミックスの基本概念である、エティックとイーミックを軸に、タグミミック・インベンションがいかなる理論であるのかを明らかにすることが本稿の課題である。

## 0. 初めに

わが国の作文教育は初等教育を中心に長い伝統を持っており、そのレベルは世界的な水準にあると言われるが、作文構想の指導に限って見た場合、実践・理論研究ともに中心は題材の取材に置かれ、題材の分析と主題の提示法はあまり重視されていないように思われる。これに対し、レトリックの伝統を持つアメリカでは題材の分析と主題の提示法に関する研究（これはインベンションと呼ばれる）が盛んで、特に1970年以降、これらの研究は目覚ましい発達を遂げている。これらの成果の中には、わが国の国語教育にとって参照されるべきものが多いばかりでなく、言語化される以前の、作文の内容を対象とする理論であるので、言語構造に左右されることが少なく、日本語の場合に適用できる可能性も高い。

筆者は、アメリカでのインベンション研究の成果をわが国の作文教育に即して検討していくことを、当面の課題として考えている。しかし、アメリカのインベンション理論の大部分がわが国には未紹介であるというのが現状であるため、そのための準備作業として、今後は当分の間インベンションの基礎的な研究を続けていく予定であり、本稿では、アメリカのインベンション理論の一つであるタグミミック・インベンションについて、その全体像および特性を明らかにしていきたい。

## 1. アメリカのインベンション

タグミミック・インベンションに入る前に、アメリカのインベンションを概観しておく必要があると思われる。

インベンションは本来、レトリックにおける一領域であり、「構想」あるいは「発見」と訳されている。レトリックは、伝統的に次の五つの領域に分けられている。

インベンション	説得に必要な材料と方法を発見する
アレンジメント	内容の配置を決定する
スタイル	思想を言語化する

メモリー

弁論を記憶する

アクション

弁論の発表法（発音や身振りを扱う）

この分類は、アメリカの作文教育でも使われており、<sup>1)</sup>作文教育でのインベンションを簡単に言えば、作文の内容を扱う領域となる。

アメリカのレトリック研究ではこの五領域の内、伝統的にスタイルの研究が盛んであり、作文指導においてもスタイルに重点が置かれていた。しかし、アメリカのスタイル論は文法を中心とした形式的なものであり、かつての、アメリカのレトリック研究および作文指導は、一般にあまり評価されていなかった。この傾向は19世紀から始まり、比較的最近まで続いていたのであるが、1960年代に入ると、主に高等教育において、伝統的な作文理論に代わる新しい作文理論が登場し、アメリカの作文教育はそれまでとは一変して高い評価を受けるようになる。ここで新しく登場した作文理論がインベンションを中心とする作文理論である。言語の形式的な面だけでなく、作文の内容を扱うインベンションが、アメリカの作文教育を大きく変えたのである。60年代後半から70年代にかけて、アメリカではさまざまなインベンション理論が登場し、アメリカの作文教育は大きな発展を遂げたが、ここで研究されているインベンションはいずれも、題材の分析と主題の提示法という、作文教育には不可欠でありながら、わが国の作文教育では比較的研究の遅れている部分を対象としており、わが国の国語教育の立場から見てもたいへん興味深いものである。

これらのインベンションには多くの理論があり、それらの分類にもいくつかの方法があるが、ヤング（Richard E. Young）の「インベンション：地勢の概観」<sup>2)</sup>が最も妥当な分類を行っていると言われている。そこでヤングは、

ネオ・クラシカル・インベンション（Neo-Classical Invention）…… アリストテレス流の古典修辞学を復活させたもの。

タグミミック・インベンション（Tagmemic Invention）…… タグミミックスと呼ばれる言語分析の理論をテーマの分析に応用したもの。

プレ・ライティング（Pre-Writing）…… 心理療法の技術を使って作文の内容を検討させるもの。

劇作家法（The Dramatic Method）…… ケネス・バークが文学批評に使った五つのキーワード（これはペンタッドと呼ばれる）を使って作文のテーマの分析を行うもの。

の四つを代表的なインベンション理論として挙げている。<sup>3)</sup>タグミミック・インベンションは、この中でネオ・クラシカル・インベンションに次いで数多く使われているインベンションであり、<sup>4)</sup>また、タグミミック・インベンションの効果を実証する実践報告も数多く提出されており、<sup>5)</sup>タグミミック・インベンションは、この四つの中でも有力なインベンション理論である。

## 2. タグミミックスとは

タグミミックスはアメリカの言語学者パイク（Kenneth Lee Pike）によって開発された言語理論である。パイクは現地調査を重視し、未開言語の分析と記述を数多く手掛けており、タグミ

ミックスはこれらの経験をもとに開発されている。その結果、タグミミックスは言語構造の分析と記述に直結した理論となっているが、タグミミックスは言語に限らず広く人間行動一般をその分析対象にするという、他の言語理論には見られない特徴を持っている。タグミミックスは元来、言語単位の規定と単位の構造化を目的とした理論であるが、パイクは人間行動も言語と同様、分節化された不連続の単位から成り立っていると考え、言語分析の方法が人間行動の分析に対しても有効であると考えるのである。「未知のものを理解する過程と言語の規則を分析する過程はよく似ている。」<sup>6)</sup>とパイクの共同研究者であるヤングは述べている。

人間行動が、分節化された不連続の単位から成り立っていると、人間が、本来は連続体である外界を、様々な単位（ユニット）に切って捉えているということである。パイクは、この単位のことを、経験のユニット（unit of experience）と呼び、物質だけでなく、感情や抽象的な思想などを含むあらゆる人間行動が経験のユニットから成り立っていると考えるのであるが、この前提に立てば、作文の主題も一つの経験のユニットとして考えられるわけで、言語単位の分析の方法によって作文の主題の分析を試みたのが、タグミミック・インベンションである。

タグミミック・インベンションを実用化した本は、アメリカで数種類出版されているが、（そのほとんどが大学の作文教科書である）その中でも、パイク自身がミシガン大学の同僚であるヤング（Richard E. Young）、ベッカー（Alton E. Becker）とともに出版した『レトリック：発見と変化』（*Rhetoric: Discovery and Change*, Harcourt, Brace & World, 1970）が最も充実したテキストであり、<sup>7)</sup>本稿では、『発見と変化』に述べられている理論を中心に、パイクやヤングの他の本によって適宜補いながら、考察を進めていきたい。

『発見と変化』ではタグミミック・インベンションをレトリックの一つと考えているが、タグミミック・インベンションは従来のレトリックとは全く異なる理論であり、このインベンションの最大の特徴は、タグミミックスの基本概念であるエティックとイーミックを使って書き手と読者を捉えた点にある。『発見と変化』の内容はそのままでは理解しにくいので、本稿では、このエティックとイーミックの概念を軸に『発見と変化』の内容を整理し直し、タグミミック・インベンションの全体像およびその性格を、理論的な面に重点を置きながら明らかにしていきたい。

### 3. エティックとイーミック

作文の過程を構成している要素として、アメリカでは伝統的に、書き手・現実・読者・言語（writer, reality, reader, language）の四つが考えられている。タグミミック・インベンションの理論はこの四要素の内の書き手と読者を中心に転回しているが、<sup>8)</sup>書き手と読者の把握は個人の把握から導かれるものであり、まず個人の把握を考えてみる必要がある。『発見と変化』の中ではエティックとイーミックの用語は使われていないが、タグミミック・インベンションの個人の把握に関して、タグミミックスの基本概念の一つであるエティックとイーミックを当てはめると理解しやすいので、エティックとイーミックの二つの概念について、以下に説明してみたい。エティックとイーミックはともにパイクの新造語であり、エティック（etic）とイーミック

(emic) はそれぞれ、phonetic (音声的) と phonemic (音素的) から作られている。音について言えば、あるがままの音をできるだけ忠実に記述しようとする、すなわち、即物的、物理的観点から取り上げようとするのが、phonetic (音声的) な見方であり、実際には異なる音でも、構造的、機能的観点から一定数に整理しようとする、すなわち、機能的、構造的な観点から取り上げようとするのが、phonemic (音素的) な見方である。たとえば、英語の [t] を精密に表記して、有気破裂をとまなう [tʰ] か、とまなわぬ [t̚] か、硬音の [t] か、軟音の [T] かななどを問題とするのは phonetic であり、これらの音を /t/ という単位にまとめるのは phonemic である。<sup>9)</sup> phonetic と phonemic はともに、音声の単位を設定するために考察された態度であるが、タグミックスは人間行動も音声と同様に単位 (ユニット) から成り立っていると考えるため、この二つの態度が人間行動一般にも適用可能となり、この二つの態度を音声だけでなく、人間行動のあらゆる面に適用したのが、エティックとイーミックである。つまり、構造や体系と無関係に現象を捉えようとするのがエティック的観点であり、現象を構造の中で有機的に捉えようとするのが、イーミック的観点である。

タグミックスでは、人間が認識している外界はありのままの外界ではなく、さまざまなユニットに切って解釈された世界であると考えられる。これは、人間が機能的な観点から即物的な差異を整理して眺めていることに他ならず、人間は常にイーミック的観点から外界を眺めていることを意味している。また更に、外界を認識する場合のユニットの設定の仕方が個人内では一定であることから、人間は誰もが、イーミック的観点を作り出しているイーミック・システムを自分自身の中に持っていると言うことができる。<sup>10)</sup> が、人間が外界をユニットに切る基準は普遍的なものではなく、個人の態度、価値、信念、情報などによって、その基準にはさまざまな違いが見られる。つまり、人間は必ずイーミック・システムを持っているが、そのイーミック・システムは個人によって異なっているのである。

タグミックス・インベンションの書き手と読者の把握は、この個人の捉え方をそれぞれに当てはめたもので、書き手と読者をそれぞれ異なった一つのイーミック・システムとして捉えようとするものである。この意味で、タグミックス・インベンションは個人重視の作文理論であるとも言えよう。ここで重要なことは、個人によってイーミック・システムが異なっているということであり、ここから、説得に必要な具体的操作手順が導かれるのである。

#### 4. 有意味な差異 (relevant)

本章ではまず、タグミックス・インベンションでの目的を考え、その後、その目的を満たすために必要な条件と、その条件に合った文章を作り出す技術について述べる。

レトリックとは何らかの説得を目的とする言語技術であり、そこでは、説得に必要な技術や条件などが研究される。タグミックス・インベンションも、みずからレトリックの一つとして位置づけている以上、何らかの説得を目的とする理論であるはずであるが、タグミックス・インベンションの目的は、従来のレトリックでの説得とはかなり違ったものであり、ここではまず、タ

グミミック・インベンションの目的から考察してみたい。

タグミミック・インベンションの目的は、書き手と読者は異なるイーミック・システムを持っているという考え方から導かれる。この考え方に立てば、書き手の主張は書き手のイーミック・システム内に生じたものであり、異なるイーミック・システムを持つ読者にそのまま理解させることはできないことになる。このため、書き手は、自己の主張が読者のイーミック・システムに抵触せず理解されるように工夫する必要があるが、書き手にとっては、これが常に最大の課題となっている。タグミミック・インベンションでは、このイーミック・システムの違いを超えることの困難さを重視し、イーミック・システムの違いを超えて主張を理解させることをその目的としている。<sup>11)</sup>

タグミミック・インベンションのこの目的は、書き手が自己の主張を読者に合わせて変更しなくてはならないことを意味し、読者を書き手に一方的に近づけようとする傾向が強かった従来のレトリックとは、大きな対照を成している。ケネス・バーク (Kenneth Burk) はこの点に注目し、タグミミック・インベンションのことを「討議的レトリック (Discussion Rhetoric)」と呼んでいる。<sup>12)</sup>これは、タグミミック・インベンションを特徴づける最大の特徴であり、ここから、心理面からの説得を排する、テーマの分析が中心となるなど、従来のレトリックには見られない特徴が導かれるのである。<sup>13)</sup>

では、この目的に見合った文章には、どのような条件が要求されるのであろうか。これは、互いのイーミック・システムの違いを超えて主張を理解させるために、書き手は何を書けばよいかという問いでもある。

ここで、イーミックについてもう一度考えてみよう。人間がイーミック的観点から外界を眺めていることは先に述べたが、イーミック的観点から眺めるとは、さまざまな即物的な差異の中で、ある特定の差異のみを意識し、それ以外の差異は無視してしまうことである。ここで意識された差異を、『発見と変化』では「有意味な差異 (relevant)」と呼んでいるが、<sup>14)</sup>イーミック・システムとはこの有意味な差異の体系のことなのである。つまり、互いのイーミック・システムが違っているとは、それぞれの有意味な差異が異なっていることであり、コミュニケーションにおいて互いのイーミック・システムの違いを超えることが困難なのは、相手のイーミック・システムにおける有意味な差異が未知のものだからである。逆に、あるイーミック・システムに関して有意味な差異を理解できれば、そのイーミック・システムにはインサイダーとして参加できることになり、主張を有意味な差異のレベルにまで戻して伝えれば、相手のイーミック・システムに抵触せず、互いのイーミック・システムの違いを超えることができる。タグミミック・インベンションでの目的は、イーミック・システムの違いを超えて主張を伝えることであるから、書き手は自己の主張を分析し、主張を形成している有意味な差異を発見して伝えることが、その目的に求められる条件となるわけである。

タグミミックスでは、ユニット (単位) の有意味な差異を発見するために、ユニットに対し次の三つの観点 (アスペクト) からの観察を行う。

コントラスト (contrast)

他のユニットととの比較

バリエーション (variation)

ユニットがその同一性を維持したままで変化できる範囲

ディストリビューション (distribution) ユニットがコンテキスト内で占める位置

コントラストは、あるユニットが他のユニットと比較してどう違っているかを発見する観点であり、『発見と変化』の言葉を使えば、「それを他のものではなく、それ自身にしている特徴は何か。」<sup>15)</sup>を発見する観点である。ユニットを捉えようとする場合、そのユニットにどのような特徴があるかを、観察者はまず発見する必要がある、これは最初に行われるべき手続きである。『発見と変化』では、東洋の「お辞儀」を文化的アウトサイダーが観察する例を挙げているが、「お辞儀」というユニットを理解するために、彼はまず、他の類似したユニット（動作）との比較によって、「お辞儀」が首を曲げる挨拶であることを発見しなくてはならない。

バリエーションは、「あるユニットがその同一性を維持したままで変化できる範囲」<sup>16)</sup>を発見する観点である。ユニットは、個々に実在するものではなく、観念的存在であり、我々が観察する具体的なユニットは、ユニットの「実現された (manifested)」姿である。そのため、「実現された」ユニットは同一の姿では現れず、時間・空間・環境などによりさまざまな異型 (variants) として現れる。( [t] と /t/ の例を思い出していただきたい。) このため、観察者は、ユニットの変化可能な範囲を知ることが必要となる。先程の「お辞儀」の例では、身体の動き・表情などのどの範囲までが「お辞儀」なのか、観察者は発見しなくてはならない。

ディストリビューションは、ユニットが、時間・空間・原因と結果・対象などのコンテキスト内のどこに位置しているのか、つまり他のユニットとの関係を知ることであり、言い換えれば、「そのユニットが生じてしかるべき『枠 (slot)』」<sup>17)</sup>を発見することである。先程の例で言えば、「お辞儀」がどのような場面で行われ (時間, 空間, 対象), どのような意味を持っているか (原因と結果, 対象) などを知ることである。

これらは、未知のユニットにおける有意味な差異を発見するための観点であるが、これを作文の主題に対して使えば、説得に必要な有意味な差異を知ることができる。これらの観点は、あらゆるテーマに適用可能であり、その場合、具体的には、それぞれの観点について複数の質問を行うという形が取られる。しかし、それらの質問に定型はなく、テーマによって質問を変化させる必要があるので、次にいくつかの例を示してみたい。この内、「体の不自由な子供に水泳を教えた経験」は『発見と変化』に挙げられている例、<sup>18)</sup>「椅子」と「民主主義」は、タグミミック・インベンションの研究者の一人であるイングリッシュの挙げている例であり、<sup>19)</sup>その他は筆者の作った例である。(コントラスト・バリエーション・ディストリビューションをそれぞれ、C, V, Dで表す。)

「体の不自由な子供に水泳を教えた経験」

C) 一般の子供に教える場合とどこが違うのか。この経験のどんな部分が、書き手にとってユニークなのか。

- V) 毎回の指導は、それぞれ、どのように違っていたか。また、どのような違いが見られたか。その指導の中で書き手自身はどう変化したのか。
- D) この指導は、障害児の指導の中でどのような位置にあるのか。書き手の人生の中で、この指導はどのような意義を持つか。この指導の目的や位置づけは何か。指導はいつ、どこで行われたか。

#### 「椅子」

- C) 椅子は他の類似した家具と比較した場合、外形、使用目的、価格、材料などの点でどのような特徴を持っているか。
- V) 椅子が、ベッドや台などにならず、椅子として認められる範囲はどこまでか。
- D) 他のユニットとの関係は。(どんな場所に置かれるか、どの家具と組み合わせて使われるか、人は椅子をどのように使うかなど)

#### 「民主主義」

- C) 民主主義ではない政治形態を挙げ、それらとの違いを考える。
- V) 民主主義は、時間と場所によって、どのように変化するか。民主主義がどのように変貌した場合、民主主義でなくなるのか。
- D) 民主主義はどのような状態の時に生まれ、またどのような結果をもたらすのか。

#### 「太郎という友人」

- C) 書き手の他の友人と比較した場合、太郎は彼らとどう違うのか。
- V) 昔の太郎はどうだったのか。太郎がどのように変わってしまった場合、友人としての太郎ではなくなるのか。
- D) 書き手と太郎の関係はどのようなものか。太郎と他の友人との関係はどうか。

#### 「ある政策」を提案する場合

- C) その政策は、他に提案されている政策とどこが違うのか。また、現状の政策とはどう違うのか。
- V) その政策はどの程度の柔軟性を持っているか。
- D) その政策が実施された結果はどうなるか。また、どのような空間・時間・環境において実施可能か。

など、この三つの観点はさまざまなテーマに対して使用することが可能である。

これらの観点は、読者とのイーミック・システムの違いを超えるために必要な、有意義な差異を発見するためのものであるが、書き手は、ここで発見されたすべての差異を書く必要はなく、読者とのイーミック・システムの違いを超えるために必要な差異のみを書けばよい。しかし、この段階で、何が必要な差異であるかが新たな問題となる。これに関して『発見と変化』では「読者にとって未知の部分を書く」と述べているが、<sup>20)</sup>これを厳密に行うためには、あらかじめ読者を決定しておく必要があり、これが可能なのはごく例外的な場合だけであり、また、仮に、読者をあらかじめ決定できたとしても、その読者にとって未知のものが何であるのかを予測することは

困難である。この点は、タグミミック・インベンションの問題点の一つであるが、自己のテーマを客観的に見直し、それが持っている有意味な差異を発見することができれば、そのテーマを理解させるために伝えなくてはならないことは、ある程度常識的に判断することが可能であり、タグミミック・インベンションにとって、それほど重大な問題ではないと思われる。

三つの観点からの観察は、書き手が自分自身のイーミック・システムを自覚するために必要な情報を得るためのものであるが、テーマの観察がイーミック・システムの自覚につながるという考えは、書き手のイーミック・システムが固定しているという前提から導かれるものである。しかし、あるテーマについて書き手が観察を行えば、そのテーマに関して、それまで書き手自身が意識していなかった特徴が発見されるはずであり、書き手が、意識していなかった特徴を自覚することは、書き手自身のイーミック・システムに変化の生じたことを意味している。つまり、実際には、有意味な差異の発見にともなって、書き手のイーミック・システムには変化が生じているのであり、このことを具体的に言えば、書き手が自己のテーマに関し、よりの確な位置づけや理論的な補強を行っているということになる。つまり、三つの観点からの観察は、伝達の段階だけでなく、伝達を行う以前の段階でも有効なのであり、『発見と変化』でも、三つの観点を更に精巧にしたマトリックスによって、未知の問題を探究することを提案しているが、この点に関しては問題もあり、別の機会に検討してみたい。

#### 5. タグミミック・インベンションの可能性

タグミミック・インベンションは、個人を一つのイーミック・システムとして捉えることを第一の前提として展開し、そこでは、他者とのイーミック・システムの違いを超えるための、有意味な差異の発見の技術が導かれた。インベンション理論の中でも、書き手と読者の規定を軸に展開している例は他になく、タグミミック・インベンションは、この点では独創的なインベンション理論である。が、インベンションの中には、視点の移動によってテーマを分析する、発見の手順（Heuristic Procedure）と呼ばれている技術があり、<sup>21)</sup>タグミミック・インベンションによって示された具体的操作手順は、この発見の手順とよく似ている。発見の手順とは、テーマを発展させるため視点を移動させる方法であるが、有意味な差異の発見は主張を読者に理解させるため視点を移動させる方法であり、両者の目的は互いに異なっている。しかし、有意味な差異を発見することは、結果的にテーマを分析することにもなり、非常に類似したものとなっているのである。しかし、この点はむしろ、タグミミック・インベンションが多分に、発見の手順を意識したものと考えるべきなのかもしれない。いずれにしろ、両者を比較することは、タグミミック・インベンションの具体的な操作手順の特徴を知るための有効な方法である。発見の手順に関してはローワー（Sister J. M. Lauer）による詳細な調査がある。<sup>22)</sup>ローワーは、コンポジションの教科書に示されている数十種に及ぶ発見の手順を分析し、それらを大きく三つに分類している。その中でも、テーマを分析するための具体的な手順を示した、本稿で使用している意味での発見の手順に当たるのは、彼女が発展的発見手順（Developmental Heuristic Procedures）と呼んでい



る一群だけなのであるが、そこでは、タグミミック・インベンションでの有意な差異の発見と同様に、質問を示すことによりテーマを分析する方法が取られている。具体的にどのような質問を行うかは学説により様々な違いを見せているが、そこで示されている質問のほとんどは、5 W I Hを基調としたものであり、テーマの外面的な部分を確認するものに留まっている。が、それ以上に、発見の手順はタグミックスのような理論的背景を持たないため、研究者が恣意的に作り出した質問が並んでおり体系性に欠けるという欠点がある。<sup>23)</sup> それに対して、タグミミック・インベンションでの手順は、タグミックスという理論的背景を持っているため、体系的であるばかりでなく、信頼性も高く優れた操作手順であると言える。発見の手順の大部分は、インベンション研究が盛んになる以前に考案されたものであり、タグミミック・インベンションに比べて見劣りすることは、当然であると言えるかもしれない。

タグミミック・インベンションは、優れた特徴を持つインベンション理論ではあるが、元来は言語理論であるタグミックスを作文教育に応用したものであり、今後に残された問題も多い。その中でも最大のものは、三つの観点を具体的な質問の形に発展させることの困難さであろう。この問題は、教師が例として具体的なパターンを示すことで、ある程度カバーすることは可能であろうが、三つの観点が一般的なものであるだけに、三つの観点を具体的な質問の形に発展させるには、ある程度の訓練が必要であると思われる。この点は、タグミミック・インベンションの最大の課題であると言えよう。

タグミミック・インベンションは、若干の問題を残しているものの、有効な操作手順を持ったインベンション理論であり、わが国の国語教育の観点から見ても興味深いインベンション理論である。更に、作文のテーマはあらゆる対象に及ぶため、作文のテーマを分析する方法は作文を離れた場合でも有効であり、タグミミック・インベンションは、単に作文だけでなく、思考や観察の訓練としての意義も持っている。このような特徴を持ったタグミミック・インベンションの可能性は非常に大きいと言えるであろう。

〔注〕

- 1) ただし、中世以降のレトリック、およびアメリカの作文教育が対象としているのは、インベンション、アレンジメント、スタイルの三領域のみである。
- 2) Richard E. Young, "Invention : A Topographical Survey" in Gary Tate ed. *Teaching Composition* : 10 *Bibliographical Essays*, Fort Worth : Texas Christian U. P., 1976
- 3) この四つの中で、わが国で紹介あるいは研究の行われているのは、ネオ・クラシカル・インベンションだけである。
- 4) 香西秀信氏が、シスター・ローワー (Sister J. M. Lauer) の行った調査(「あなたの大学では作文の授業にどの構想論を用いているか。」)の結果を紹介しているが、それによると、ネオ・クラシカル・レトリックが33校、タグミミック・インベンションが24校、劇作家法が16校、プレ・ライティングが8校である。(香西秀信「説得的言論の発想形式に関する研究(1)」)

(『流球大学教育学部紀要 第29集』1986)

- 5) R. E. Young and Frank M. Koened., "The Tagmemic Proceduer :An Evaluation of its Uses in Rhetoric" in ERIC. ED : 084517  
Camillus E. Lee, "Discovery Proceduers for Contemporary Rhetoric : A Study of the Usefulness. of the Tagmemic Heuristic Model in Teaching Composition", Ph. D. Dissertation, Univ. of Michigan, 1970  
Hubert M. English Jr., "Linguistic Theory as an Aid to Invention" in *College Composition and Communication*, 15 ( Oct. 1964 ) pp. 136-140  
などにタグミミック・インベンションが実践で効果を挙げた事例が報告されている。
- 6) R. E. Young, "Toward a Morden Theory of Rhetoric : A Tagmemic Contribution" in Gary Tate and P. J. Corbett ed., *The Writing Teacher s Sourcebook*, Oxford U. P. , 1981
- 7) タグミミック・インベンションとして分類される教科書にはこの他,  
Frank Flowers, *Practical Linguistics for Composition*, Odessey Press, 1968  
Josef M. Williams, *The New English : Structure/Form/Style*, New York Free Press, 1970  
などがあるが、これらに述べられているタグミミック・インベンションの理論はいずれも、パイクのタグミミック・インベンションを模倣したものであり、『発見と変化』に書かれている理論をタグミミック・インベンションの理論として扱うことに問題はないものと思われる。これらの教科書の比較は、ヤーノフの次の論文に述べられている。  
Charls Yarnoff, "Contemporary Theory of Invention in the Rhetoric Tradition", *College English*, 41 ( May 1980 ) pp. 552 - 560
- 8) バーリンは四要素の内、言語に重点を置いてタグミミック・インベンションを捉えようとしている。確かに、『発見と変化』では言語を「発見のための道具」として重視しているが、これは、主として『発見と変化』の後半に出て来る問題の探究においてであり、タグミミック・インベンション全体を捉えようとする場合は、本稿で述べるように、書き手と読み手が中心に置かれるべきであろう。(James E. Berlin, "Contemporary Composition : The Major Pedagogical Theories", *College English*, 44 ( Aug. 1982 ) pp. 765-777)
- 9) この具体例は、大塚高信編『新英文法辞典(改定増補版)』(三省堂, 1970)p. 406による。
- 10) 『発見と変化』では「イーミック・システム」という用語は使わず、「世界の解釈 ( image of the world ) 」という言葉を用いている。イーミック・システムという言葉は、ヤングが彼の論文 ( R. E. Young, op. cit., "Toward a Modern Theory of Rhetoric", p. 140 ) の中で使っているもので、本稿でもこのイーミック・システムという用語を使うことにする。

- 11) パイクの弟子の多くが、宣教師として文字のない地域に派遣され布教活動を行っているが、タグミミック・インベンションでのこのような説得の把握は、元来は、この異文化との接触の中で得られたものなのである。「変化は説得しようとしている相手のイーミック・システムの中で生じた時、最も効果的でかつ長続きする。」(Young, op. cit., "Toward a Modern Theory of Rhetoric", p. 140) これは、異文化の中で布教活動をしている宣教師の経験の中で得られた教訓であるが、パイクはこの教訓が、共通の文化の中で生活している人々の間でも有効であると考えてるのである。
- 12) Kenneth Burke, *Permanence and Change*, quoted in Pike, op. cit. *Rhetoric: Discovery and Change*, p. 130
- 13) レトリックには様々な学説があり、一概に特徴を述べることは困難であるが、レトリックには伝統的に良い文章の条件を考察する「文章の徳目 (virtues)」と呼ばれる領域があり、そこでは古くから、簡潔・流暢・強さなどの要素が重視されていた。(これも、修辞学説により挙げている要素に違いが見られるが、18世紀のイギリスではほぼこの三要素に定着し、その後、現代のアメリカのコンポジションにまで影響を与えている。)この内、後の二つは明らかに心理面からの説得を狙ったものであり、伝統的なレトリックは読者の内面に変化を起こさせることを目的としていたことが分かる。心理面からの説得は、相手をこちらに合わせようとする意図の現れであり、また、その結果として、伝統的な修辞学ではテーマの分析以外の手段も重視されたのである。伝統的な修辞学とタグミミック・インベンションの違いは、このように、それぞれの目的の違いから生じたものと考えることができる。
- 14) Pike, op. cit., *Rhetoric: Discovery and Change*, p. 54
- 15) Ibid. p. 55
- 16) Ibid. p. 55
- 17) Ibid. p. 55
- 18) Ibid. p. 56
- 19) Hubert M. English, "Linguistic Theory as an Aid to Invention", in *College Composition and Communication*, 15 (1964), (reprinted in ERIC. ED : 035624)
- 20) Pike, op. cit., *Rhetoric: Discovery and Change*, p. 58
- 21) 「発見の手順」の意味する内容は、使用する研究者によって異なり、一定していない。本稿ではウィンターロードの「発見の手順は、様々な角度から眺めることにより、書き手が主題を観察することを助ける手段である。」という定義に従って、「発見の手順」を使用する。(W. Ross Winterowd, *Composition/Rhetoric: A Synthesis* (1986), p. 39)
- 22) Sister J. M. Lauer, "Invention in Contemporary Rhetoric: Heuristic Procedures", Ph. D. Dissertation (1967), Univ. of Michigan
- 23) ローワーが、発見の手順の例として挙げているものの中から、『現代修辞学』(Modern Rhetoric) というテキストに示されている発見の手順での質問を次に挙げておく。

1. それは何か。
2. それは何を意味するか。
3. それは何を伴っているか。
4. それはどのように働くか。
5. それは何を意図しているか。
6. それはどのようにして生じたか。
7. それはいつ発生したか。
8. それはどんな価値を持っているか。
9. 何が重要なのか。
10. それが意図している機能は、どんな時に充分発揮されるのか。

(Cleanth Books and Robert P. Warren, *Modern Rhetoric* (1961), p. 37, reprinted in Sister J. M. Lauer, op cit. "Invention in Contemporary Rhetoric : Heuristic Procedures", p. 117)